

義太夫
三味線

兩
秘
傳
全



井上播摩椽直傳、巖谷二六先生題字
六代竹澤彌七翁秘訣、佐藤万亭先生序文

義本丈
三味線
西秘傳
全

市川左團次君題字
市川送升君題字
竹柴其水先生序文
波南且嶺野叟編述

二竹園藏版



忽 忽
狀 然
英 兒
雄 女

勤人之妙
存一心中

考友乃真一力子
頗嗜院曲家法
該法每演無人
不感激題此贈者
同好古梅老人



文弥といふ或は一仲或ハ小中或ハ
道具屋或ハ表具屋等皆其の語ら出
し、大丈乃名成以て世に傳へたり
の流沁をかち門戸を立てたり
貞享の頃攝勅天王寺村に農丈ありて

五郎兵衛といふぶら生得淨瑠璃或好
み其の頃の名人ある井上播磨椽清水
理兵衛等も就して秘曲或傳へたり
遠きより平家福もの舞故二僧あり
より近くハ其播磨掃摩も大丈角大

丈道具屋表具屋等可語りどぞ一節
くハ丈もいふに祭文説教地藏誣鉢
叩江戸小室相の山音頭舟歌おとに
あままゝ博く引き旁く収めて世に
かあり弘めしと彼の農丈の五郎兵

衛外里之戎竹本義丈丈とふ義丈
丈節乃祖也されバ義丈丈とふ浄瑠璃
中の長もて浄瑠璃とふ名ハ義丈
丈も奪いしとらとふも可あむかく義
丈丈ハ諸曲乃華を唱ひ英戎人言む

多の事ばらばらに成りてよと亦容易なるに
況してその蘊奥に成り極むるをば
淨瑠璃大系図に豊故事等よと
その末歴を述べ浪華土産瑠璃
天狗等よと其の文句を説き淨より早合

點同秘曲抄等には其の語り方成りもの
をより古人の斯道に於ける勉むる
りよふに且山嶺野叟曾て
古人の書中より其の秘傳と奥義と
成り抜萃しるる味線の譜又ナマリ

去るを古く未だの事と云羅
一石つて淨瑠璃相傳と云頃日
一本を袖にりて来り余に序を乞
ふ余亦義大夫哉私淑者因て
一言を卷首に題す

明治廿五年八月於藜亭

万亭一力



高年

月
月

月
月

月
月

月
月

明治三十六年春

松芳



温古

送升生



序

義太夫三絃兩秘傳と劇場で申す名題の出し其看板
を一見せば是れ々々々々と噂も高く當り狂言小異な
ぬ今度且嶺先生が座頭兼る壹人俳優小次郎壹小冊
を著せし人氣を必す大人賣切観客ヤシヤと賞せ
しれ成程仕草がこまかひと劇評家とぬ愛讀者が語
り方の引澄を數頁に記臆あせせむを其を其を其を
と程々斯ごと自然と鼻も幸四郎彼素人義太夫の法
方逸も浮氣も成りペイ〜俳優も座頭めかし舞臺
の道具は鞍馬山木ノ葉天狗を一人もなく皆僧正坊

の役廻り所謂義太夫の千代飛助出来ん然し天狗小
成給ふ此編輯者が舞臺へ顯れ彼天百日小錦の
四天柱巻の見得をされば木ノ葉天狗の鼻も縮み
元のペイく俳優とならんか實小此冊の丹精を此
道の人々が必ず讀んで徳を得ん杯と我の譽詞ハほん
の立見の向ふ正面棧敷の客の題字へ交り最におまが
ま一けれども此ことが立見で序する小おん

明治三十六年の春

演劇作者 竹柴其水記



義太夫三弦兩秘傳

緒言

音曲の事たる遠く神代に基ひし因襲の久しき種々の變化を經
て足利氏の末世に至り淨瑠璃なる語り物初めて産聲を揚げし
より戯曲界を壓倒し貞享元録の頃竹本義太夫(筑後少椽と云ふ)なるも
のに及び聲律節譜大に整頓し世人をして益此技を慕はしめし
より以來士君子閨媛の腦裏を離れざる延齡娛樂の良劑とはな
りぬ物變り星移りて明治の聖世に際會せるや萬國の音樂を一
堂に合奏せしむる一大團圓の奇觀を顯出せるも素より人種の
異なる各自感觸の等しからざる敢て怪むに足らざるなり斯る盛
時に當り益本朝固有の審美を發揚せしむるもの恃り淨瑠璃則

義太夫節に勝れるものあり宜なり朝こなく野こなく都鄙其流
行一世を風靡す隨て著書雜誌の類續出斯道の研竄に資すこ雖
こも聲音呂律節譜の秘訣に至つては専門の太夫こ雖こも通曉
せるもの晨星も啻ならず豈斯道の一大缺点ならずや予少時文
學の傍深く音曲を好み古人竹本播摩の大椽の眞傳なる一冊を
得て匣底に藏す這般飯田氏の需に應し中古三弦の泰斗たる六
代目竹澤彌七翁の秘訣をも加へ斯道大家の協贊を得之を訂正
増補し淨瑠璃の沿革より節譜の起原及び稱呼等汎く引證を列
舉して初學の徒の楷梯こなさんこす好技の諸子是を座右に置
く時は師傅に依らすして自ら斯道の妙趣を味ひ蘊奥を極むる
の捷徑ならんこ爾云ふ

波南 且嶺野 叟誌

義太夫三弦兩秘傳

目次

- 一 籤切秘法 壹
- 一 義太夫語り方意得 三
- 一 時代と世話の別 五
- 一 詞の意得 六
- 一 節譜の稱呼 附起原摘記 九
- 一 助語七情の別 一三

一 語り方引證

一 三味線十二調子の事

一 なまりしらべ

一 三味線の譜

一 語り物の起原

一 三祖神の履歴

一三

四七

四九

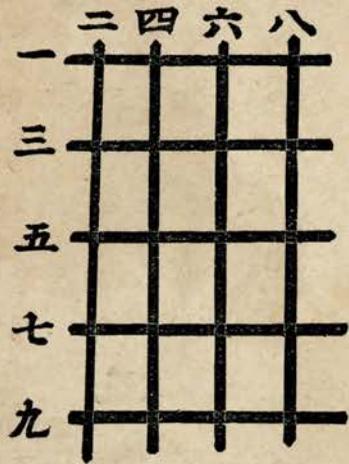
六壹

七壹

八五

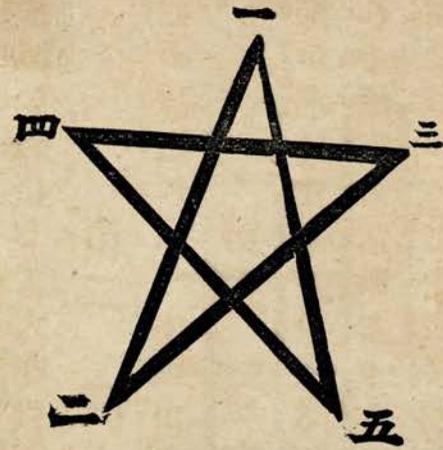
籤切秘法

左之二圖は太夫高座に昇る時上り口に於て圖下の句文を口中に稱へ指頭にて一二三の順に随ひ空に畫し騰座する時は聽衆靜聽するの秘法あり



臨^{りん}兵闘^{じやうとう}者^{しや}

皆^{かい}陳^{しん}列^{れつ}前^{ぜん}行^{まう}



空風大水地

義太夫語り方の意得

第一 ハリメリの事

張滅の義にして大小強弱を加減して語るなり

第二 静山急

始め静寂に出で中頃山の如く泰然と末は疊んで語るあり

第三 産字の事

節の別は生字より發るなり或は揺り或はもち或はあがす等何れも産字の活動なり左に掲ぐる中にて(い)音を長く引く時は(い)音に販り(ろ)音を長く引く時は(を)音に販る以下皆同意あり

わあ かあ よあ たあ れあ ろあ つう ねあ なあ らあ むう うう
 いい ろを はあ にい ほを へあ ごを ちい りい ぬう ろう をを

あいのまをたくうやまあけふうこをねふてああ
さいきりゆうめみしいるひいもせすすう
又いころは等ありて音を揺るなり即ち三ツユリ五ツユ
り等を云ふ

第四 阿ウンの事

夫阿は口を開くウンは口を結ぶなり太夫阿云時は三味線引ウンと答へ又太夫ウン云ふ時は三味線引阿と受る是陰陽の道理なり凡て此の心持にて語るべし

第五 修羅の事

修羅は心を鎮めて間拍子油断なく口はやに語るべし心急げば間拍子崩れ文句も分らずなるあり故に心静かよ口拍子にて語るべし間拍子と間拍子一ツになれば見へくづるゝあり文句静

かなる時は心持を早く語るべし

第六 間拍子の事

間拍子とは恰も人の歩行の如く右の足一尺を出せは左の足亦一尺出で少しも長短なし又右の足前に進む時は左の手前に出で左の足進む時は右の手前に出ず是陰陽の道理なり義太夫間と三味線の間と相合ざれば拍子はづれと云て音曲とあらず故に間拍子は充分注意する事緊要あり

時代と世話の別

時代とは総て品格を持ち言語乱れず眞面目なる語物にして随て詞も節も優美に氣品高く近世流行物の内菅原傳授手習鏡繪本太功記の類を云ひ世話物とは多く坊間の一小事仮令ば戀娘

昔八丈三勝半七の如き世話の総稱にて節詞共輕はづみにさらさら淀みあきを主とするなり

詞の意得

物語は凡て込み入りたるを咄しするなれば可成キツバリ

ご聴衆の合点し易き様語るべし

有位人 地合詞ごも品格よくしこやかに語るべし同し貴顯人

にても菅相函の如きご太閤秀吉の如きは各々性質を異にす其他は推量りて其人々の性情を汲取り能々心を用ゆべし

愁 近來總じて花美に流れ眞に腹わたをゑぐるが如き熱涙を

翻さしむる太夫稀なり聴衆を泣かしめんご欲せば已れ先背汗を出して眞境に迫るべし不具者に非る外は頭を上げ得ざ

るべし

手負 音聲乱れ五音の調子整はず引息甲斐なくツク息計りの

様に語るされども夫も餘りに騒がしく荒きに過ぐるは悪る

し自然に苦痛堪へざるの状あるべし

醉漢 あたま勝ちに語尾のもつれるやうに巻舌にて言ふは宜

しけれご甚たしき時は文句聞取れず音聲の寛急大小に心を

注ぐべし

老人 男女共巖丈なるも手弱きも凡て老人の趣き言葉遣ひに

心を附くべし去れば迎齒抜けて舌廻はらざる如き作り音は

宜しからす工風あるべし

女房 年配により夫々分ちあり婦人の性情を能く心得武士は

圭角にし商人は厭みなく只やさ形に語るべし

子供 愛らしく、かん勝ちに直なるべし余り小兒のこはいろを
 眞似るは悪ろし其他其役其人により各同じからず能々研究
 して事實に迫るを最も良しとすべし

節譜の稱呼

一 アガル
 一 中テラス
 一 サカル
 一 サゲテモツ
 一 ノム

レイル、
 つマハス
 ハラス
 二 フル
 一 ンル

✓ ハネル
 一 モツ
 二 モツテ
 一 ツル
 一 イル、

〇 ハシテ
 モム
 一 モツテ
 ハネル
 ● チヨイ
 クキリ
 二 クキリ
 ハセル

二 モツテ
 スコシラス
 一 サクル
 一 ツツク
 フス
 一 ハツテ
 ハヌル

心^シ中^{チュウ} シチュウ

心^シウ^ウ シウ

心^シ心^{シン} シシン

心^シ心^{シン} シシン

心^シウ^ウ シウ

心^シ心^{シン} シシン

心^シウ^ウ シウ

心^シ心^{シン} シシン

心^シ入^{ニル} シニル

心^シ上^{ウヘ} シウヘ

心^シ心^{シン} シシン

心^シ心^{シン} シシン

心^シ シ

うぎん 冷^{ヒヤ}泉^{イハ} 大^{オホ}和^ワ 播^ハ摩^マ 川^{カハ}崎^{サキ}か^かり 地^チは^はる 大^{オホ}す^すゑ 七^{ナナ}ツ^ツゆ^ゆり 小^コま^まは^はし 小^コを^をく^くり ぎ^ぎん^んを^をく^くり

中^{チュウ}ぎ^ぎん 表^{ヒヤウ}具^ク 長^{チヤウ}地^チ 吉^{キチ}野^ノ 舞^{マヒ}太^{タイ}夫^フ 角^{カク}太^{タイ}夫^フ 八^{ハチ}郎^{ロウ}兵^{ヘイ}衛^{エイ} 江^エ戸^コ 地^チ藏^{サウ}經^{キヤウ}か^かり 中^{チュウ}ぶ^ぶし

上^{ジョウ}ぎ^ぎん 道^{ドウ}具^ク屋^ヤ 半^{ハン}太^{タイ}夫^フ 半^{ハン}冷^{ヒヤ}泉^{イハ} 上^{ジョウ}た^たき 鹿^{シカ}踊^{ユウ} 外^{ガイ}記^キ 三^{サン}ツ^ツゆ^ゆり 九^クツ^ツゆ^ゆり 文^{モン}彌^ニを^をく^くり

は^はる^るふ^ふし 播^ハ摩^マか^かり 文^{モン}彌^ニ 江^エ戸^コ冷^{ヒヤ}泉^{イハ} 海^{カイ}道^{ドウ} 半^{ハン}中^{チュウ} 四^シツ^ツゆ^ゆり 説^{セツ}教^{キヤウ}か^かり 中^{チュウ}を^をく^くり 色^{シキ}を^をく^くり 五^ゴ字^ジを^をく^くり

かん五字をこし 大をこし 三 十二
 吟三重 愁三重 きをい三重 大三重
 上三重 丁間 半間 割間
 四ツ間 祭文 さわり

右起原摘記

文彌こは山本土佐の門人後に關本一流豊後節の祖なり
 道具屋こは道具屋吉右衛門なるものより始まる
 表具こは表具屋又四郎ご云ふもの語り出せしあり
 播摩こは井上市郎兵衛後に播摩ご改む
 角太夫こは源太夫の弟子天和の頃一流をなせしもの
 祭文こは安達雪降袖萩の愁訴鈴ヶ森れ駒の出八百屋た七の

道行其他種々あり二上り三下りあり隅田川道行に稜清
 め奉るご云ふは祭文あり

さはりこは淨瑠璃中少しにても外の節にかゝるをさはりご
 云ふ

助語七情の別

ハア。 ハア。 エ。 ア。 ア。 ヲ。 イヤ。 イヤ。 ムウ。
 ナー。 ナー。 ナウ。 ナフ。

語り方引證

安達京

三ツ切
ヲクリ

まて入ふり

繪本太刀記

十段目
中ヲクリ

まふれぬかくまふれぬ

千本櫓

キヲイ 三重

おまのりまて右轂の者

雙糸

セツユリ

つふかひ舟のかつり

纓谷

ちり泣目泣志んぐま

表具

天神ぬのの刺しあま

金毘羅

利生記

舟の舟れ上二公に寄る

百度平

スエヲカリ

あへと権現へ

全

文祿

七度結ん心姉と次六度

契り舟とかりも形ちま

りまり果

全
多々キ

せまる病者の靴みみ

全
冷泉

こころの火おき
うらと流黄ハ時花

上りんや
文殊

字押多々あのみみ

佐倉惣斎
子別
表具カリ

これが親子の別きつと

鏡山七ツ目
江戸冷泉

あひ積るうい海

岸龍
日上

未来の為と妹殺の女

彦山権現
九ツ目
中冷泉

おみ竹の音おとて

道春鞍
ハリマ

めくと志ふ鞍の後室
長後西へ出向ひ

古子成
日カリ

二度目清書

表具

日吉丸

三坂目

全上

阿漕浦

平次住家

表具カリ

安達原

三ノ切
ハルノシ

先代萩

日
上

全

ヤエト

東鑿

三ノ切
江戸

立流あつ健あつらわ九ツと
現あつらうとあつあつらう

世にのびづらうとあつあつらう

あつあつらうとあつあつらう

自業自得とあつあつらう

あつあつらうとあつあつらう

あつあつらうとあつあつらう

あつあつらうとあつあつらう

下るけりかゝるあつあつらうとあつあつらう
義秀秀徳法画とあつあつらうとあつあつらう
権満志とあつあつらうとあつあつらう

五人兄弟初段
大三重

安達原
三股目
大落シ

太切記
尼子崎
全上

玉藻前三段目
地花経カリ

花の上野
ふ川の段
小ヨクリ

二度目渡書
山科
全上

忠臣藏八目
ヨクリ

楠者漸三
邑ヨクリ

た鼓の丁あめ鼓はき
ふこの秋こそ

あめは情がくあり

ぬり流の汐境浪より

さうぶぐごさくあり

空の河糸をばせりら

積石敷も

霧よりあつた命ごと

霧れ糸のまといひ

娘小浪が云号粒も

あそび合ふが社父集りて入

先代萩の殿場

ギンヲクリ

武蔵前三段目

上ギンヲクリ

忠長橋六ッ目

ウギン

蝶花形八目

月上

太切記十段目

夕、キ

鏡山七目

上夕、キ

花襟八目

中夕、キ

妹脊山

四ノ切
は美

か出と錦の代名

る海ととも銀箔の

まのるおとひの投書

うぶのさけぬめのよと

秋の妹文物淋し

後とれ出をひかざの

介と浪りのさそひか

替も志どろりか

あつとんうのを教と教

されがあまをむとつら

櫻城状
後友生碑
全上

先代叢六目
文弥

深模ね
妹脊門松
全上

玉藻前
三段目
冷泉

寺子屋
大ス工

若根並強
滝ノ段
全北

阿漕浦
日上

三三三間堂
平太郎信家
林湊

君に命をうけ奉るの

たとふ合親者の

清あがりに雅子を

いとこふのあかたのあま

遠回後同性を忘れ

つねにひびんの後

ねむまもたのまき

母も清あまのあま

女の病氣の

世流と世の世流と

杖の杖あまのあま仰ぐ

伊弉諾
沼津里
スエテ

熊谷陣屋

三ノ切

中キシ
九

熊谷陣屋

三ノ切
オフシ

全 心

八陣八首

心イタ

全

スエ

お深
久松野崎村
心キシ

祝の教をいじりかつと

つとむとすむいほきあはる

来来の遠ひもしつ

熊谷戦じのつとむ

くさね教うまのあふぞ

あふ回十九日がをる

あひつひあれた切多のひ

心祥清ふくれなるが

細さ線香ふいほ

全五

先代萩

虎殿

ありん

三務酒屋

うし下

三務酒屋

ぶち下

八陣八首

ぶち下

三務酒屋

ぶち下

揚州合邦辻

下ノ巻

揚州合邦辻

下ノ巻

あきし

久松おまが継中つ付の

七の八のうら合おやく

後承まのり其まのり

むしんかあまのり

今承あまのり今と

乃光の

今承あまのり今と

今承あまのり今と

今承あまのり今と

あきし

東鑑四白
扉踊

河漕浦
平次住家
川濟カリ

玉藻前
二段目
説表カリ

か弱カニ
鈴ヶ森
全上

三十三間堂
早太帝住家
角太夫

万戸の
三ノ口
全上

伴賀哉
六ツ目
地色

太切記
十段目
五字房シ

梅のつぼみ春のあけ

石砌の地安のあけ

花出のそれと姉妹が

辰雨のひつどの

あめともの

舟の今をめぐりふん

えの柳ふゆもぞわ

櫻も花もあつさく

はるふ痛んころ

見合を報りさへんり

百分石もあつさく

先代教旨目
カシ
五字落三

新白日記

大井川
カシ五字落三

安達原

三鼓目
甲ノ

太刀記

尼ヶ崎
全上

嘉平次伝承

スエラ

兜軍記

琴ヶ責
全上

襟花形

ハツ目
ホツ三

質店

月上

残心あはれしむくどあ

さいまへくわいふるあ

返り契さへも得りて

美ふふ喰付返り病つる

突初業も再戦も一交にさうと

却初び前後ふ是ふ返りあ

夫と娘と子と慕ひ

親とともなふもふし沈む

のを殺して中へんせと

甲人と投出をも方の覚悟

かも先へ先石傳ひ

字難とくかよひあがり

後山七ツ目

九ツエリ

太功記

十段目
クリアケ

二度目清書

全上

寺子屋

四ノ切
又称テトシ

朝白日記

大井川
全上

太功記

尾ヶ崎
四ツ目

関取千両藏

福川内
たをまや

河階平次住家
全上

仏もへきく目もあへ

行死といふものつらあひ

めまじぶあをいむせうう

ゆれ因果ふ絶縁ち住家

ふとゆとせえ上てめつもと
あつてはげまじが

巻と揃りあざあざし(まうといふん

勢うが余のえり同もああり

コレ見のひ光秀及軍の首達ふ

くまぐまお疎やこそ何ふ

あひとあつとあつたバ

町中のひるたふまも福川が

めら勢きのぞみ中へ

忠臣蔵
喧嘩場

三重

義経子本掛

ウレイ

三重

忠臣蔵

セツ目

吟三重

羽見昆渡松

小森場

上三重

迎駕

聚楽町

三ツユリ

至次住家

四ツユリ

忠臣蔵

九段目

三ツユリ

寺子屋

の板

全上

力足踏まてこせつろ

三六

浪と理おた箱をたぎりと

ゆを思と障子何日新を

いごこ念ふ

袖もがも一対ふ裂りあつ程
つらめりい

うのしめ入方後悔浪

大星現子三人流程か
あかり色とて箱よりしが

お小指り源流まは
あうりさのうく見え合せり

三七

小春治平

上タキキ

今

セツキヨウ

ニ上

新吉原

揚屋

七ツ目

加々見山

七ツ目

七ツ目

油屋おん

十人切

あえ

三日太平記

びと

油屋おん

十人切

爛燭まき。清るあまと

心かいらとど箱せまる

海あぐにたる酒と

あともあまけけの

心くしの果るあまの

とろくの管はあま

祝あんどあめのしつ徳

今たハあぐらうら

奈さの鐘もあま

貝鐘ふれを交れ

程あいのいんくつひめが

あまあ分指ハあま

弁慶上仗
表具

免代萩
法殿
スエテ

油屋おきん
十人切
道具屋

加々見山吉首
江戸冷泉

夕秀存考
上ギン

太切地尾之崎
カブシ

盛衰記
席ノ切
カブシ

忠臣講釈
セツ目
全上

こんおねとよもえせつらぶ

きんぐらふとあつた

おきん免代萩

おひさしとあつた

夕秀存考

太切地尾之崎

盛衰記

忠臣講釈

富士見西行

五段目

舞

佐会曙宗立帝

子別

ノシカリ

檀下ノ山道行

ハ市共ユフシ

まらの道行

海道

梅の枝とて巻れぬらの

河東はのえゆる

公の是悟ぞ夜れる。

とんと脊中へりて

係^{カレ}り人のえん国とふぬ川が

ゆくも山中又たなま

山中の

憚九道行

吉野

全

外記

西ふのあふぐにやれノホに木の葉が

向ふの小松原君のこゝろを

まろ野ふ山をめぐりて并木の松

まると味方の軍兵と名づけやうて

以加勢かまふ夜のことく

まらの道行

ま

家^{トキ}ふ樹の青まれば谷ふ落るる

あはれそら恐しむれあり

科をせせむる科とてり

新吉原
揚屋

スエテ

師がねめが妹も

あふしねじりあり

三日太平記

九ツ目

まうへる一桃が心のふし

心と

たふぐきく

日蓮記

三記切

林清
ツクリ

怪ふ唱の妻お子の歌も

大安寺
江戸

竹の次巻決めて里志人

三日太平記

九ツ目

心と

抱て胸れと足下かけ

伊賀越

沼津里

心と

くくと公は目算

間より地ふめる田地のう

心と
心と
心と
心と
心と

ろ

い

蠟路老録六一入今命
燭頭人 字膳込

ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	い	い	い	い	な ま り し ら べ
う	う				ち	り			
ろ	じ		く		ぜ	こ	の		
く	う	ん	く	じ	ん	み	ま	ち	

に

は

荷二日女逸幡箱初母憚
物本本房 根ッ様り

に	に	に	に	に	は	は	は	は	は
		よ							
も	ほ	ほ	う		こ				
		ば					さ	か	
つ	ん	ん	う	け	た	ね	つ	ま	り

ぬ

糠 拔 縫 布 盜
ひ 人

ぬーぬーぬーぬーぬー
すー
ひー

かーくーひーのーごー

を

驚 大 思 伯 奥
く 坂 ば 母 へ

おーをーたーおーたー
ごーほーもー
ろーさーへー
くーかーばーばーへー

り

利 陸 立 流 流
足 儀

りーりーりーりーりー
ろー うー

くーくーうーうーぎー

る

類 類 類 類 器
書 燒 火 守

るーるーるーるーるー
いーいーいー
しーしーくー
よーよーくー
よーうーわーいーすー

へ

閉 別 編 返 平
口 事 家

へーへーへーへーへー
いー んーいー
こー

うーつーんーじーけー

ち

千 遲 次 陣 忠
年 參 郎 儀

ちーちーちーちーちー
ごーごーごーごーごー
ごーさーろー うー
せーんーうーんーぎー

ほ

棒 北 奉 奉 保
國 納 公 養

ほーほーほーほーほー
つーうーうー
こーのーこーよー

うーくーうーうーうー

と

泥 飛 捕 兎 供
坊 込 角 に

ごーごーごーごーごー
ろーびー
らーかーもー
ぼーこー
うーみーるーくーにー

ろ

龜其宗僧息
末砌 才

ろーろーろーろーそー
のー くー
まーみー さー
きー
つーりーうーうーいー

れ

練連連禮
ン判ン儀

れーれーれーれー
んー いー
ばー
んーんーんーぎー

ね

直寝年捻猫
段鳥始首 猫なで

ねーねーねーねーねー
たーこーんー じーこー
くーなー くーなー
んーりーじーびーでー

つ

筒勤月杖妻
め蔭

つーつーつーつーつー
きー
さーかー
つーめーけーるーま

か

傘霞金勝顔
持 は

かーかーかーかーかー
らー ねー
かー すー もー ほー
さーみーちーつーわー

わ

割忘笑割私
合

わーわーわーわーわー
りーすー たー
あーれー らー くー
いーるーふーりーしー

た

樂對立谷斷
み面寄間食

たーたーたーたーたー
のーいーちーんー
しーめーよーにーじー
みーんーりーまーきー

よ

嫁用由義用
心衛經事

よーよーよーよーよー
うーしーしー
じーやーつー
めーんーるーねーじー

く

帥陸國雲首

くくくくく

さがにもひ

の

野延野登逃

袴邊るれ

ののののの

ば
か ぼが

まへへるれ

ら

落落羅乱雷

花馬紗暴神

ららららら

つ んい
く し ぼじ

わばやうん

な

繩夏波浪何

ミミ事

ななかなな

に
こ

わつみみこ

ま

町孫待窓眞

顔

まままま

が

ちごつごほ

や

家藪宿山役

根屋道目

やややや

ま
ご く
み

ねぶやちめ

う

埋嬉憂謠裏

ルひ目曲道

うううう

れ ら
め さ た
し み

るいめるち

む

無室胸娘昔

理

むむむむむ

すか

りろねめし

あ

足麻朝危難
さき有

あーあーあーあーあー
やーりー
がー
うーたー
しーさーさーきーしー

き

切際急銀君
り 十郎様

きーきーきーぎーきー
んー
じーみー
うーさー
ろー
りーわーうーうーまー

て

手照手傳照
持す負兵衛月

てーてーてーてーてー
もーらーおーんーるー
べーつー
ちーすーあーいーきー

さ

紗坂咲作最
綾 前

さーさーさーさーさー
いー
せー
やーかーくーくーんー

ふ

風袋文踏夫
呂敷 殺婦

ふーふーふーふーふー
ろー みー
くー こーうー
しー ろー
きーろーみーすーふー

は

縁繪回遠遠
談像香國慮

はーはーはーはーはー
んー んーんー
がーこー
たー ごーりー
んーうーうーくーよー

け

下儉毛朝蹴
段糸込

けーけーけーけーけー
たー いー こー
んーんーごーさーみー

こ

腰御御子御
元恩證供運

こーごーごーこーごー
なー
たーいーごーうー
しー
ごーんーよーもーんー

ひ

病病 病病 病病
病病 病病 病病
病病 病病 病病

ひひひひひ
ひひひひひ
ひひひひひ
ひひひひひ
ひひひひひ

ゑ

江繪繪 榮繪繪 選榮繪繪
江繪繪 榮繪繪 選榮繪繪
江繪繪 榮繪繪 選榮繪繪

ゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑ

め

面酪飯 酪飯飯 飯飯飯
面酪飯 酪飯飯 飯飯飯
面酪飯 酪飯飯 飯飯飯

めめめめめ
めめめめめ
めめめめめ
めめめめめ
めめめめめ

ゆ

油岩行 夢行行 雪夢行行
油岩行 夢行行 雪夢行行
油岩行 夢行行 雪夢行行

ゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆ

せ

悻詮席 關席席 世關席席
悻詮席 關席席 世關席席
悻詮席 關席席 世關席席

せせせせせ
せせせせせ
せせせせせ
せせせせせ
せせせせせ

も

盲紋森 盛森森 物盛森森
盲紋森 盛森森 物盛森森
盲紋森 盛森森 物盛森森

ももももも
ももももも
ももももも
ももももも
ももももも

し

暫死仕 知仕仕 死仕仕
暫死仕 知仕仕 死仕仕
暫死仕 知仕仕 死仕仕

ししししし
ししししし
ししししし
ししししし
ししししし

み

見身代 見身代 見身代
見身代 見身代 見身代
見身代 見身代 見身代

みみみみみ
みみみみみ
みみみみみ
みみみみみ
みみみみみ

三絃十二調子之事

黄鐘 三トアス 一越調

黄鐘 二トアスコラモテ一本 断金調

黄鐘 二トアスコラモテ二本 断金調

盤渉 二トアスコラモテ三本 平調

盤渉 二トアスコラモテ四本 勝絶調

上与五本同 下与調

六本同 双調

七本同 鳧鐘調

八本同 黄鐘調

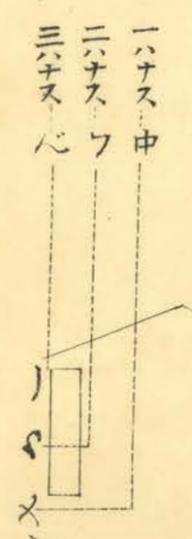
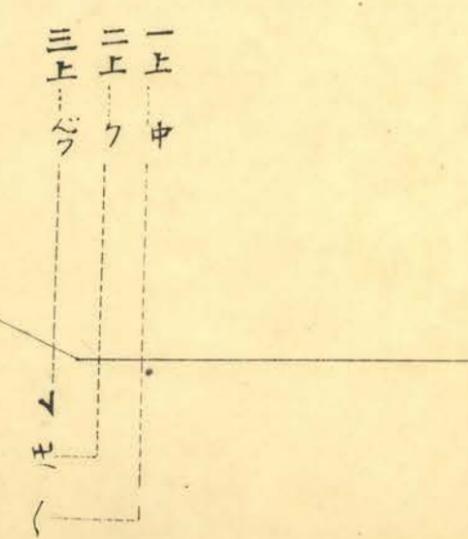
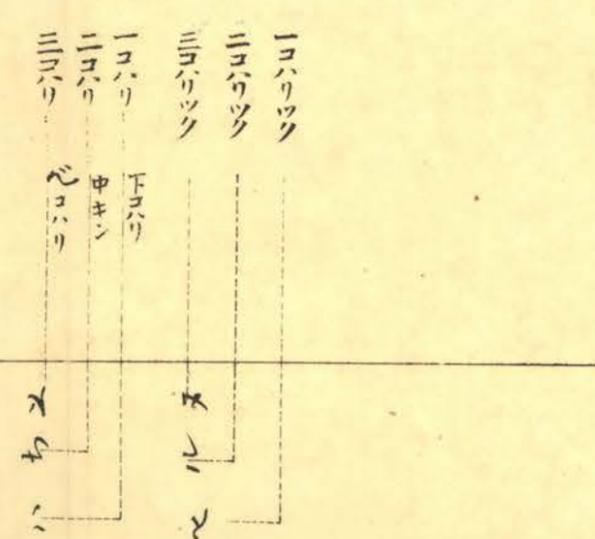
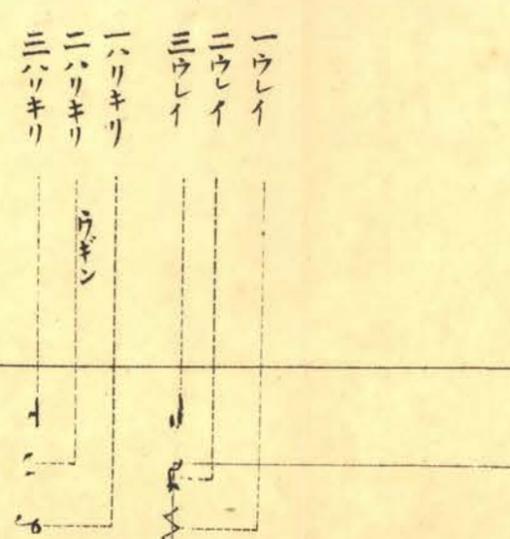
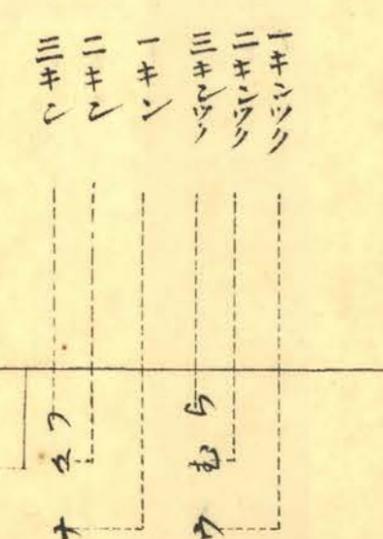
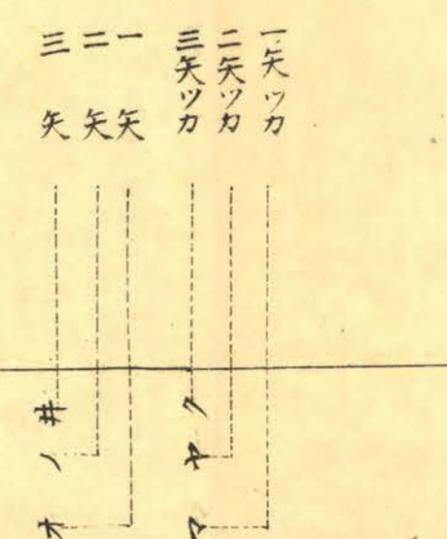
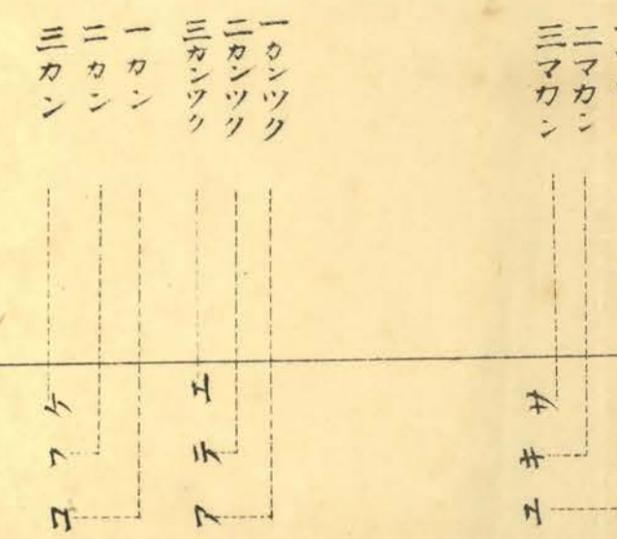
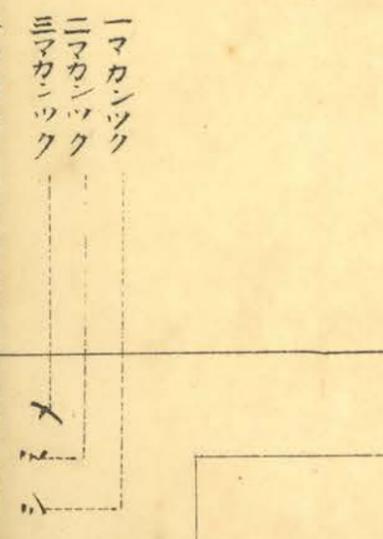
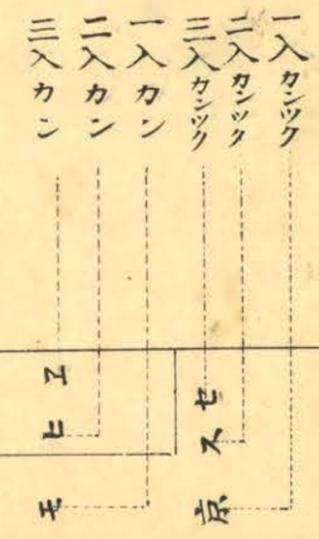
九本同 鳧鐘調

十本同 盤渉調

十一本同 神仙調

十二本同 上與調

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ	夕	シ	ソ	ツ	子	ナ	ラ	ム	ウ	ヤ	マ	ケ	オ	ク	コ	エ	テ	ア	フ	サ	キ	ユ	メ	ミ	シ	エ	ヒ	モ	セ	ス	京
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---



Handwritten musical notation in various styles (kuzushiji) including:

- イロハニホト
- アイルン
- ツナテ
- コヨリ
- ウケ
- ツナキ
- 四ツ

三卷十二體中文

八本同	黄	三
十本同	身	二
六本同	双	一
十本同	丁	三
十本同	潮	二
十本同	平	一
十本同	金	三
十本同	一	二
十本同	一	一

小ツクリ

キツイニ重

スエテ

ノレバ

ニホトニシ

カクツクツク
カクツクツク
カクツクツク

カクツクツク
カクツクツク

カクツクツク
カクツクツク

クツクリ

キツイニ重

スエテ

ノレバ

ニホトニシ

カクツクツク
カクツクツク

カクツクツク
カクツクツク

カクツクツク
カクツクツク

キツクリ

キツイニ重

スエテ

ノレバ

ニホトニシ

カクツクツク
カクツクツク

カクツクツク
カクツクツク

カクツクツク
カクツクツク

キンヲク

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

キンヲク

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

キンヲク

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

クレイニ重

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

引ルニ重

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

大ヘイニ重

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

カニニニ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ゲノレ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ゲノレ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ノレカ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ハツシレ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ハツシレ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

冷泉ヲク
「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

トヲク

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

キヲク

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

フニイニ重

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ケイジニ重

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

シコハニ重

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ゲノレ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ゲノレ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ゲノレ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ハツシレ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ハツシレ

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

フキン

「ニニニニニニニニニニ」
「ハハハハハハハハハハ」

ハツミヲクリ
ニエニウウ
ウニウウ

大三重ハセハセー
ケルハセーハセ
セーハセハセー

ハツミ

クキン
ハセハセハセ

ハツミヲクリ

ハセハセハセ
ハセハセハセ
ハセハセハセ

ハツミ

クキン

ハツミヲクリ
ハセハセハセ

ハセハセハセ
ハセハセハセ
ハセハセハセ

ハツミ

クキン

ハツミヲクリ

ハセハセハセ
ハセハセハセ
ハセハセハセ

ハツミ

クキン

ハツミ

クキン

ハツミヲクリ

ハセハセハセ

ハツミ

ハセハセハセ

ハツミ

ハセハセハセ

クキン

ハセハセハセ

ハツミヲクリ

ハセハセハセ

ハツミ

ハセハセハセ

ハツミ

ハセハセハセ

クキン

ハセハセハセ

ハツミヲクリ

ハセハセハセ

ハツミ

ハセハセハセ

ハツミ

ハセハセハセ

クキン

ハセハセハセ

ハツミヲクリ

ハセハセハセ

ハツミ

ハセハセハセ

クキン

ハセハセハセ

表具

ハセハセハセ

一エリキヨウキ
ハ一カクハセ
ニニニニニニ
ハハハハハハハ

ニエリ
セニニニニニニニニ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

三エリ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

四エリ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

一エリキヨウキ
セハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

半長七
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

三エリ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

夕、キ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

長七
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

セツキヨウ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

三エリ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

夕、キ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

長七
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

セツキヨウ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

三エリ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

夕、キ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

五エリ

ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

江戸

ケトケ、ウウ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

相ノ山

ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

冷泉

ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

六エリ

ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

六エリ

ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

宮ソノ

ケケニケサメリメリ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

七エリユリ流シ

ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

麻ツドリ

ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

宮ソノ

ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

文流

ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ

ハユリ

ハユリシウセウ
ハユリシウセウ
ハユリシウセウ
ハユリシウセウ

平家

ハユリシウセウ
ハユリシウセウ
ハユリシウセウ
ハユリシウセウ

アミト

ルチルチルチル
ルチルチルチル
ルチルチルチル
ルチルチルチル

ケイシヨウツクリ

ルチルチルチル
ルチルチルチル
ルチルチルチル
ルチルチルチル

丸ユリ

丸ユリシウセウ
丸ユリシウセウ
丸ユリシウセウ
丸ユリシウセウ

舞

舞シウセウ
舞シウセウ
舞シウセウ
舞シウセウ

道具屋

道具屋シウセウ
道具屋シウセウ
道具屋シウセウ
道具屋シウセウ

文殊ヲトシ

文殊ヲトシシウセウ
文殊ヲトシシウセウ
文殊ヲトシシウセウ
文殊ヲトシシウセウ

ヲトシ

ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ

ヲトシ

ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ

大トシ

大トシシウセウ
大トシシウセウ
大トシシウセウ
大トシシウセウ

ヲトシ

ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ

林清

林清シウセウ
林清シウセウ
林清シウセウ
林清シウセウ

ツク

ツクシウセウ
ツクシウセウ
ツクシウセウ
ツクシウセウ

文殊

文殊シウセウ
文殊シウセウ
文殊シウセウ
文殊シウセウ

ヲトシ

ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ

文殊

文殊シウセウ
文殊シウセウ
文殊シウセウ
文殊シウセウ

ザグ

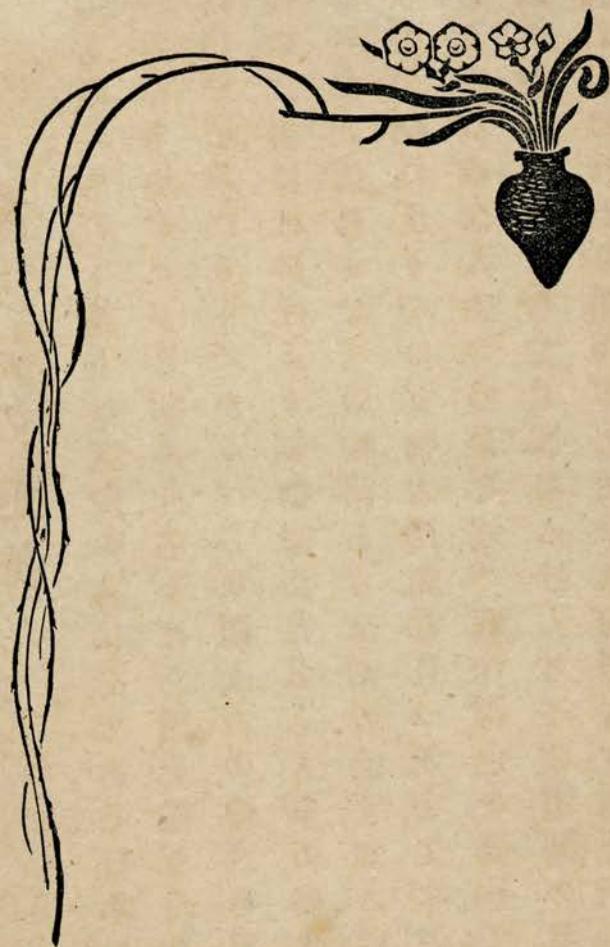
ザグシウセウ
ザグシウセウ
ザグシウセウ
ザグシウセウ

河内

河内シウセウ
河内シウセウ
河内シウセウ
河内シウセウ

ヲトシ

ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ
ヲトシシウセウ



語り物の起原

抑も語りものゝ起りは話説の義にして古く日本書紀には談の一字をものがたりと訓み此名をば話説を綴りたる書物に用ひ物語と讀みたるものあるべし我國上古の傳説を記録したる紀記の二書には神代よりの物語甚た多し人皇の御代となりても夢野の鹿浦島子などの物語あるは人の能く知る處あり降りて平安の朝に至りては文物大に開け且つ仮字文字の用法自在ありしかば或は人生の盛衰を述へ或は脚色を設けて人情を寫し以て彼の優美にして柔懦なる佳人才子の消閑の具となすこと大に行はれたり語り物即ち是なり物語ものゝ中にて最古きは伊勢物語と竹取物語となり二種の中赫哉姫を主とせし竹取物語

ころ殊に古く又作者も詳かならねど何れも延喜の朝の以前のものなる可く伊勢物語りは或は在原業平の手に成るご云へ或は伊勢の太輔の作なりごも云へて古來其説一ならざるも文中延暦遷都の後遠く距らざる時の様を書きたるなごを見れば其の古き事推して知る可きなり此種類の物語りにして後に出来たるは大和物語なり其作者或は業平の子滋春なりご云ひ或は花山天皇なりごあるも信ぜられず次に世に出でたるものは住吉物語宇津保物語あり以上の諸書に就ては諸説紛々何れも其世に公にありし精細なる年代等を知る能はざるは遺憾の至りなりご云ふべし之に次て顯はれし濱松中納言物語落窪物語ごりかへばや」の類皆其作者を詳かにせず源の順なる人屢其作者の一人ごして世に傳へらる順は村上冷泉圓融諸帝の朝に歴任

せし人にして詩歌に巧みにして後撰和歌集を撰みし梨壺の五歌仙の一人なり此外物語物の種類は甚た多し就中住吉物語の梗概を言はんに中納言兼左衛門の督なる人の娘攝津の住吉の浦に流寓せしが行末大に富み榮へたるさまを寫し繼母は之に反して不幸ある境遇に陥りし事を述べたるが如きは稍や後世の所謂勸善懲惡主義を寓したるものゝ如し慶長の始め瀧野澤角兩檢校平家物語に悉しく琵琶の妙手たり后世風雅の盲人輩が批把に合はして専ら平家なごを語りし時代より考ふれば今日音曲界の進歩も亦驚くに堪へたり

淨瑠璃の起原ご沿革ごを述るには先づ是を孕胎せし謠曲の事よりせざるを得ず夫謠曲は緒言にも云へる如く室町將軍以下の士大夫皆戦争の間には專宴樂に耽りし程に猿樂の舞田樂の

能かご盛んに行はれ應永の頃は
大和の人結崎次郎と云ふもの
此技を以て將軍義滿に寵せられて
觀阿彌の名を賜はり其子世
阿彌宗全と稱するもの亦殊に寵を蒙り
き父子相續いて從來の
猿樂田樂及其他諸種の舞曲を折衷し
新曲を案して之と共に謠
曲を興したり蓋謠曲の節譜は今様等
の歌ひ振りと平家物語とを斟酌して
時好に適合すべきやう作りたるもの
ならん而して此新様の舞曲の名稱は舊
によりて猿樂と稱へたれば從來のを
かしき態は之を狂言として區別する
に至り又世阿彌の時既に觀世と名乗
りしともいふ音阿彌の子蓮阿彌に至
りて又大に將軍義政に寵せられたり
是より先義滿猿樂を以て武家の樂式
と定めしかば此技漸く盛んになりて
義政の時には既に觀世金春寶生金剛
等各々流を分ちて四座の猿樂と稱ふる
に至りしかば

謠曲文の新作も甚た多かりき謠曲文
の作者は詳かからず謠曲錄かごには
觀阿彌等を之が作者として挙げたれ
とも此徒は所謂作曲家にして其文の
作者には非ず唯謠の文に節譜を施した
るまであるを作者の如く云い傳へた
るならんと云ふ去れば江口山姥等は
一休和尚の作と云ひ源氏供艱は河上
神主の作と稱へ卒塔婆小町は寶性院
宥快の作とし高砂兼平なごは僧正徹
の作なりと傳ふ而して謠曲の新作は
足利氏の中頃に最も盛んにして觀阿
彌のは百曲に下らず音阿彌も十余曲
程あり江戸時代となりて顯はれしは
其數極めて尠くと云ふ徳川時代の文
章にして人の嗜好を惹き尤も勢力を
占めたるものは戯曲界にして所謂淨
瑠璃院本演劇脚本等なりうは單に事
件を叙述するに止まらず其構成聲律
節譜を主とし之を樂器に伴はしめ之
を劇場

に演ずるに適す可きを旨とするものを総稱したるなり而して所謂小説とは普通の意義の小説にして其種類甚た多し二者の中戯曲界は先に發達して早く其頂點に達し小説は漸後れて起り其極盛の時代は今を去る事未た甚た遠からざるなり乃ち世人が戯曲界の泰斗と仰ける近松門左衛門は既に元録より享保に涉りて其名を轟かし岡清兵衛なる戯曲家は尙其已前に名ありし人なり戯曲と云ふ意義を廣く解釋するときは謠曲も亦其中に入るべきものなり蓋し謠曲は前に既に陳るが如く之が聲律節譜を調へ之を管鼓に合はすのみならず又之を舞踏に演ずるを得る所より考ふれば明かに戯曲の性質を備ふるものといふべし夫の狂言の如きに至りては殊に然り去れば謠曲と狂言とは實に戯曲の濫觴とも云ふべきものなり戯曲の中最も夙く

顯はれ且つ最も盛なりしものを淨瑠璃とあす殊に我國にては演劇の脚本あるものは甚た勢力なく常に淨瑠璃に壓倒せらるゝ姿あるにより淨瑠璃を以て直ちに戯曲なりと云ふも蓋し大差なかるべし淨瑠璃は世人も知る如く足利時代の末葉に顯はれしものなり之を語るには始めは只扇を以て手を叩き案を打つて拍子を取りしものなりしか琉球國より渡來せし三味線(元名蛇皮線)の普く行はるゝに至り専ら之と伴ふととなり以て現今の有様とはなりぬ淨瑠璃の名の起原は如何にと云ふに彼の小野阿通の作と唱ふる淨瑠璃十二段艸子あるものに基くあり此艸子は三州矢矧の宿の長者子あきを憂ひ鳳來寺山の薬師淨瑠璃光如來に祈願し其靈驗を以て一女子を得たるにより之を淨瑠璃姫と名つけぬ偕源の舍那王丸(後に九郎判官義經)が奥州

に下らんとする途すがら矢矧の宿にありて是の姫に契りし事の次第を述べしものなれば則ち姫の名を以て其書に冠せしあり是より遂に此の種の戯曲の総稱とあるに至りき其十二段なるは或は薬師の十二神將に象ることも云へ或は平家物語の十二卷あるによることも云ふ蓋只偶然十二段となりしものなるべきか其作者さへ確かならず一説に彼の小野阿通あるものは容色文藝共に秀れたる女子か織田信長の病褥中の徒然を慰めんために作りしものと云ふ抑も阿通とは如何なる人なるか予輩之を詳かにせずされども文藝に巧みにして歌舞をも心得たる當時名譽の婦人たりし事は疑ひなし元來淨瑠璃の名は汎稱にして語り物の総ての種類を指しとなるべし今日と雖も長唄端唄に對する段物(即語り物)は凡て之を淨瑠璃と云ふなり淨瑠璃

の中にては清元節常盤津節其他世に行はるゝもの少からざれども就中最盛んなるは義太夫節とす蓋し淨瑠璃か種々の改良を経たるに當り貞享元録の頃竹本義太夫なるもの出て一機軸をなしは既に前に述べしが如し然れども江戸時代二百五十年の間には名人巧者の輩出せる極めて多し關東にては語齋節、土佐節、外記節、河東節等あり關西にては一中節、豊後節等最も名あるものとす當時は戰國擾乱の餘波を受け上下文字を解するもの尠かりしかは人皆語り物の如き専ら聽聞し安きものを喜びき作者も亦寥々たるを以て續々新作を出たして之か嗜好に應ずる能はず僅かに在來の舞曲の書又は御伽草子の類に曲節を附し一段切りの淨瑠璃節となして語るのみなりき下りて徳川氏の時に至りては寛文延寶の頃に岡清兵衛(重俊)なる者

江戸に出てぬ此人博文強記にして當時淨瑠璃節に名ありし櫻井丹波椽の爲に所謂金平本あるものを作り出せり金平は高館八島あこの如き一段切りのものに非ず數段に亘れるものを一册こしたるものあり阪田金時の子金平ある怪力絶倫の士が悪魔猛獸を退治する事柄を以て一扁の骨子こしたるが故に此名あるなり此類の武張りたる語り物は巧みに當時の人情風俗に適合したるものなりしに因り能く世に行はれぬ然れども鬼神妖怪を語るや其作用甚た高尚ならず又甚た靈妙あらざるにより能く怪力乱神を忘信せし時代には適應せしかとも悲壯凄慘を以て人情の最高度を示すこ云ふ明治の今日にありては幼稚にして見るに堪へず齒牙にたも懸るに足らざるものと云ふの外あし是こ同時に浪花に井原西鶴なるものありて又淨瑠璃を

作りぬ其次に出てし近松門左衛門ころ實に非凡の力を淨瑠璃に盡し其眞光を發揮せし稀代の人物なれ門左衛門は長州萩の人氏は相森名を信盛こ云へ巢林子こ号す始め僧となり次て京に出てゝ一條家に仕へ從六位に叙せられしが後辞して市居したりき抑元録寶永より正徳享保に涉りては天下既に全く泰平の象を見はして遊惰の風少しく發生せり木偶演劇こ云ふもの大に行はれしが如き其一端なり抑演劇は之を演ずるには皆淨瑠璃節を用ふる事なりしが從來の戯曲には佳妙なるもの少あく近松は大いに之を憂ひしに恰も當時淨瑠璃の名手なる宇治加賀の椽井上播摩の椽或は竹本筑後椽なご云へる輩の新作を需むるに遭ひしかば乃ち數百部の戯曲を公にしたり抑近松は學和漢を兼ね古今に通したる人なり故に其文章創意亦昔日

の金平本の比に非す先つ謠曲を和らめ話説の稍や複雑なる五段の續きものごし首尾貫徹せる戯曲ごしたりしは是近松の大効なり後の所謂丸本則ち竹田並木等の作ある大序より團圓までを総欽せる戯曲の門を開きしものごす

近松の文章は巧緻精細にして字句を苟且にせず引例典故何れも憑據あり其人情を寫したる所人をして凄然ごして悲み啞然ごして笑はしむ夫れ文章は記事叙事の文を作るより難きはあし但し普通の記事叙事の難にあらず事物を記載し又は叙述して其眞に迫るを難しご云ふあり且つ其著はす處文字の外に多少の寓意あるが如し即ち日本振袖初めには人情を假りて神道を論し釋迦如來誕生會には遊戯に托して佛理を説き此他軀山姥百日曾我等の戯曲數十部中國姓爺合戰雪女五枚羽子板曾我

會稽山を三絶作ご云ふ殊に國姓爺は最卓絶の大作にして當時支那語に翻譯せられて海外までも渡りしご云ふ要するに近松の著は其鬱勃たる胸中の志氣を漏らしごものなれば快樂を與ふるご同時に多少世道人心に益あらざるなし近松は享保九年に七十二歳にして没しぬ然れごも其風は靡然ごして天下に遍く爾後淨瑠璃を唱ふる者は近松を宗ごせざるものなきに至りたり後寛保より寶歴に涉りて竹田出雲清定あり著はす所の菅原傳授手習鏡義經千本櫻等世に名あり特に仮名手本忠臣藏の如きは其傑作にして尤も人口に膾炙するごころあり之ご同時に並木宗輔出てご一ノ谷嫩軍記等の著あり近松半二の本朝二十四孝阿波鳴戸近江源氏先陣館妹背山女庭訓關取千両幟伊賀越道中双六等の著あり此等を近松以後の名匠ごなす或人曰く

近松門左衛門は淨瑠璃道に於ての聖人なり竹田出雲は亞聖にして近松半二は大賢と稱すべしと蓋し適評と云ふべし此他淨瑠璃の作者として名あるものに西澤一鳳並木千柳紀海音近松徳三等著述と人物と其數甚た多し又平賀鳩溪の如く博覽多識の士の氣慨あるものが戯に筆を執りて其不平を戯曲に泄しゝものあり神靈矢口の渡弓勢智勇巷相生源氏等氏の傑作あり彼の満都の士女の喝採を博せし朝顔日記は近く嘉永年中に出でし院本なれども其原本は近松徳三か熊澤蕃山の作れる「霧の乾ぬ間」といへる今様を種子として組み立てしものなりと云ふ其對談動作を叙述するの妙なると其聲律節譜の備はれるは以て戯曲の文例として十分の價值あるものとす以上は戯曲界の系統に關せる大要に過ぎず此間長年月に亘れる事實の詳細を縷

述せんには到底一小冊子の竭すところに非ず他日大成して公行するの期あるべく是より修業習得節譜の元由を述べんとす凡る音曲中義太夫節程六ヶ敷ものあらざれば斯曲を學はんと欲する士女は先人の研究せられし節譜章句に思を懲らし稽古すべし都鄙就學の輩を見亘すに只三弦に伴はれて平地を行くの慨あり所謂素人稽古にして斯曲の實相を習得せざるより曖昧模糊の間に終りぬるころ遺憾の極と云ふべし此門に入らんとするの諸子は前の節譜句讀に能々心を潜め覺悟するときは期せずして東天の曙光に向ふが如くあらん

三祖神の履歴

近松門左衛門 名は信盛本姓梶森氏幼名彦四郎平安堂集林子

不移山人の號あり元長門萩の人世々毛利家に仕ふ或は越前の人と云ひ或は三河の人と云ふ幼にして肥前唐津の瑞鳳山近松寺に入り薙髮し古澗と號す後京師に出つ其弟岡本一抱により髮を畜ひ一條家に仕へ從六位に叙せられ既にして致仕し去りて市塵に寓し姓名を改めて近松門左衛門と云ふ享保九年十二月廿二日大坂心齋橋通りの書林風月堂に於て歿す年七十二日蓮宗最利寺に葬る翌年夏再び唐津近松寺に改葬す今や音律和調靈神中に祀られ 瑞垣能久爲蘇神是あり竹本義太夫 後筑後少椽に進む寛永元年甲辰坐元を止め正徳四年甲午九月十日浪華に歿す年六十四貞享より正徳に至る三十有余年語る所の淨瑠璃百六十余段門人數多ある中豊竹越前尤も著る土塔山起願寺に葬る法名釋の道喜後百余年に

して竹本喜義太夫なる者改めて碑を作る

又別に荒陵山天王寺の西門今の納骨堂の傍に義太夫の碑と稱するものあり施主豊竹越前椽藤原重恭にあり今や音律和調靈神中に祀られて 華柵佐俱羅井神と稱せらる

竹澤權左衛門 本姓は尾崎竹本義太夫竹屋庄兵衛と俱に義を結ひ義太夫の三弦を弾く貞享二年義の操坐を開きてより竹澤と改め始終斯曲の爲よ竭す所あり其流派皆三弦の糸と棹の太きを用へしめしを以て時人太棹の稱あり實に斯曲三弦の祖なり音律和調靈神中に合祀されて 巖護誌多比喜の神と云ふ

序

淨瑠璃の歌曲たる能く喜怒哀歡の情を紆へ聽く者をして感極まり情迫り身曲中の人物たるの想あらしむ眞に歌曲の泰斗と稱すへきか古來斯藝の世に歡迎せられ遂に今日の隆盛を見る實に所以ある哉近時社會の上下を問はず之に遊ふもの年を趁ふて増加し隨て之れに關する著書の世に出づるもの鮮しとせず然かも未だ曲節の秘奧を解き斯道の餘師とするに適するものを見ず是れ余か斯界の爲めに

常に遺憾とする所なり某氏之に見る所あり研讃茲
 に數年一書を著し來りて余に示す之れを閱するに
 三弦の調謳歌の譜其秘奥とする所は細大漏らさす
 之を説く反覆叮嚀にして適實を旨とせり初心の士
 一たひ之を繙かは容易く其蘊奥を極むここを得ん
 乃ち所思を述へて之に序す云爾

逸 亭 素 閑



商 標

登 録

大 雄 丸
 大 雄 散
 大 雄 膏

以上三種ハ淺草區千束町木樽家ノ秘
 方ノ神藥ニシテ効能ノ顯著ナルハ既
 ニ天下世上ノ知ル處ナリ

東京市淺草區千束町三丁目百卅五番地

木樽彌惣次

此大雄丸ハ發音ノ際服用致シ置ク時ハ聲ノ疲レル
 事ナク亦皺枯タル時はレヲ腹用スレバ身體ニ爽快
 ナ覺ヘ美音ヲ生シ記臆力ヲ増ス効能如神

大 販 賣 店

萬 卷 堂 伊 藤 雅 樂
東京市神田表神保町五番地

至 誠 堂 加 島 虎 吉
東京市日本橋區人形町通住吉町

東京市京橋區南傳馬町一丁目十番地

遷 本 尚 古 堂
東京市神田區旅籠町一丁目十七番地

日 野 屋 牧 野 准 藏
東京市淺草區並木町廿二番地

玉 森 堂 福 嶋 書 店
東京市芝區三田一丁目十六番地

東京市京橋區銀座四丁目十二番地

春 祥 堂
東京市麴町區麴町五丁目三番地

文 光 堂 森 田 鐵 太 郎 堂
東京市牛込區神樂町三丁目六番地

書籍雜誌商 盛 文 堂
東京市麻布區飯倉町四丁目

世 益 堂 杉 村 書 店

π

λ

μ

ν

ξ

π

λ

ι

ι ι ι

ι ι ι



ι ι ι